

二〇一九（平成三十二）年度 金沢学院大学 入学試験問題

推薦入試

二〇一八年十一月三日（土）実施

国語（基礎学力）

一 注意事項

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから8ページまであります。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

二 解答上の注意

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、「解答番号は10」と表示のある問いに対して

④と解答する場合は、下記の例のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

問題は次のページからです。

問1 次の(1)～(5)の傍線部の漢字表記として最も適当なものを、それぞれの語群①～⑤の中から一つずつ選べ。解答番号は

1

 ～

5

。

(1) 病がカイホウに向かう。

- ① 開放 ② 解放 ③ 介抱 ④ 快方 ⑤ 会報

(2) コウセイな判断。

- ① 公正 ② 構成 ③ 更生 ④ 攻勢 ⑤ 厚生

(3) 内閣シジ率が低下する。

- ① 指示 ② 私事 ③ 思時 ④ 師事 ⑤ 支持

(4) もつとソウイ工夫をしてください。

- ① 創意 ② 相違 ③ 総意 ④ 僧衣 ⑤ 層位

(5) 北海道のキカン産業。

- ① 機関 ② 期間 ③ 旗艦 ④ 基幹 ⑤ 帰館

問2 次の(6)～(10)のカタカナ語の意味として最も適当なものを、後の語群①～⑩の中から一つずつ選べ。解答番号は

6

 ～

10

。

(6) オピニオン (7) コンセプト (8) スキル (9) ニッチ (10) オブザーバー

語群

- | | | | | |
|------|-------|-------|-------|------|
| ① 妨害 | ② 観察者 | ③ 批判 | ④ 引率者 | ⑤ 概念 |
| ⑥ 技能 | ⑦ 意見 | ⑧ 不可能 | ⑨ 実演 | ⑩ 隙間 |

問 3 次の(11)と(20)の各文のうち、日本語として正しいものには①、誤っているものには②をマークせよ。解答番号は

11

 と

20

。

- (11) 古い吊り橋を走ってくる子どもの姿を見て、鳥肌が立った。
- (12) 授賞式がしめやかに執り行われた。
- (13) 郷土料理に舌鼓を打つ。
- (14) 耳障りのいい言葉にだまされるな。
- (15) 後悔後に立たずと言うが、学生時代にもっと勉強しておけばよかった。
- (16) 名監督が采配を振ったが、大敗した。
- (17) あなたの意見に異存はありません。
- (18) 反対意見が過半数を超えた。
- (19) こんにちは、どちらへおでかけですか？
- (20) あきれて二の句が継げない。

問 4 次の

21

 と

25

 に入れるのに最も適当な語を、後の語群①と⑩の中から一つずつ選べ。解答番号は

21

 と

25

。

- (21) 海老で

21

 をつる。
- (22)

22

 の寢床。
- (23) 柳の下にいつも

23

 はいない。
- (24)

24

 を読む。
- (25)

25

 の頭も信心から。

語群	
①	鯉 ひらめ
②	秋刀魚 さんま
③	鰻 うなぎ
④	鰯 いわし
⑤	穴子 あなご
⑥	鯖 さば
⑦	鯛 たい
⑧	鰯 ぶり
⑨	鰯 あじ
⑩	泥鰌 どじょう

問5 次の(26)～(30)の四字熟語について、誤りがあれば誤っている漢字の番号①～④を、(例)のようにマークせよ。誤りがなければ⑤をマークせよ。解答番号は

26

 ～

30

。

(例) ① 四面楚家 ↓ 正しくは「四面楚歌」なので、④をマーク。

(26) 異句同音 ① ② ③ ④

(27) 厚顔無知 ① ② ③ ④

(28) 羊頭苦肉 ① ② ③ ④

(29) 青天白日 ① ② ③ ④

(30) 物見遊参 ① ② ③ ④

問6 次の各文は有名な古典文学作品の冒頭文である。作品名を後の語群①～⑧の中から一つずつ選べ。解答番号は

31

 ～

35

。

(31) 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。

(32) 春は曙。あけぼの やうやう白くなりゆく山ぎは、すこし明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

(33) 男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり。

(34) 行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。

(35) 月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人なり。

語群			
①	土佐日記	②	徒然草
③	おくのほそ道	④	源氏物語
⑤	枕草子	⑥	方丈記
⑦	更級日記	⑧	平家物語

問7 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今日の夕食はカレーライスだった。自宅のカレーライスである。

最近は外であまりカレーライスを食べたことがない。レストランで何か食べようとメニューを見ながら、カレーライスはいつも除外される。カレーなんていつでも食べられるではないか、と思うのである。せっかく外で何か食べるんだから、もつと何かちゃんとしたものを食べようと思うのである。

ちゃんとしたもの。

カレーライスというのは可哀相だ。ちゃんとしてないみたいに思われているのだから。

本当はそうではない。カレーライスはもつとも安全な食品なのである。麻雀でいうと安全パイだ。はじめてのレストランで様子のわからぬときにカレーライスを注文すれば、そう大きくはずれる、つまりそれほどマズイということはないものである。メニューを見ながら何にしようかと迷って決断のつかぬときは、カレーライスしておくのがまず無難であり、間違いがない。

というところがカレーライスの悲哀なのだった。間違いがないものだから、まず最初に除外される。いつでも食べられるんだから、何もいま食べることはない、と思われてしまうのである。ああ可哀相なカレーライス。

で今日の夕食はカレーライスだった。自宅のカレーライスというのはある安定した間隔をもって食卓にのぼる。十日に一回とか、月に一回とか。

これも安全パイだからこそそうなるのであるが、自宅のカレーライスの場合はそういう食べられ方が自然であり、そこが外でのカレーライスと違うところだ。

味も違う。味はもちろんレストランによっても違うのだけど、うちには子供がいるのだ。こんど中学一年生。もう大人に近いのだけど、やはり電車に乗るときはまだ子供料金であり、カレーライスはあまり辛いのが食べられない。これが問題である。子供のうちにあまり辛いのを食べるとバカになるというが、あれは本当に正しい理論なのだろうか。

私は前述のように外食であまりカレーライスを選ばないので、それを食べるときはだいたい自宅ということになる。ところが子供がいるので、ピリツと辛いのを食べることができない。このことを考えるだけでも、子供というのは早く大人になって家を出ていくべきである。家の中でいつまでも甘いカレーライスを食べていていいのか。

まだ中学の一年生だからやむを得ないが、しかしあと三年ぐらいガマンして、高校ぐらいになればピリツと辛いカレーライスにしたいと思う。もう高校になれば脳ミソも固まって、新たにバカになるといふこともできないだろう。

しかし私の子供のころは、カレーライスといえばピリピリと辛かった。その辛さはもう逃れられぬものだと思ひ諦め、食卓には必ずコップに水を用意して、その冷たさで口の中をなだめながらフーフーと熱いのを頬張っていた。それが本当のカレーライスというものではなかったのか。

なんて正義を叫ぼうというわけではないのだけど、今日の夕食はカレーライスだった。ひとつ不思議なのは、ジャガ芋が入っていないことである。トロリと溶けたルウの中に、肉や人参や玉ねぎといったものは散見するが、期待のジャガ芋というものが見当らない。

これはニョーボーの作品である。ニョーボーはジャガ芋が好きではない。しかし自分が嫌いだからといってジャガ芋をカレーに入れないということが許されていいものだろうか。

というような家庭料理に対する不満は、全国のご家庭の男女諸君も互いに持ちつ持たれつしていることだろう。

かくいう私はジャガ芋、とりわけカレーライスの中のジャガ芋が好きなのだ。ここに家庭悲劇の発生する毒の種が、あのジャガ芋の芽のように埋め込まれているのであるが、あれは青酸が含まれているので必ず包丁の角のところでグリツと抉り取っておく必要がある。

いや、そのあたりの常識問題はともかく、カレーライスの中のジャガ芋の好きな人は、やはり戦後の食糧難を生き抜いてきた人々だろう。ジャガ芋の味もさることながら、あのゴロリとしたボリュームが何とも心強く感じられるのだ。

それと同じ原理なのか、あのころのカレーライスにはごつてりとメリケン粉が入っていた。最近ではシャブシャブ状でライスの中にしみ通るほどの水っぽいカレールウがナウイというか、ポストモダンというか、ハウスマヌカンというか、何だか信奉されているみたいだけど、まあそれもいいだろう。でも昔のカレーライスというのは粘土みたいに固かったのだ。

これは誇張ではなくて、半分残したカレールウを明くる日鍋の蓋を取ってみると、もう糊（のり）というか味噌（みそ）というか、酷いときは全体が玄米パンみたいな固まりになっていたものである。それほどメリケン粉が混入してほとんどそれが本体となっており、そのことが豊かさの象徴とされた。

とにかくお腹いっぱいという第一目的を絶対に外すことはできなかったのである。

そして辛かった。いまみたいにバーモントカレーとかいろいろ加工されて、しかも辛さの表示1とか2とかあるのを選ぶわけではなくて、すべてを素材から調理した上で罐（かん）入のカレー粉をどどつと入れるのである。せっかくカレーライスを食べるのに辛くないという理由がなかった。つまり家庭でカレ

ーライスを食べるといふときには何か意気込みがあり、それは祝祭であつたのである。
まったく日本人というのは、異文化を引き入れて神に祭り上げるのがうまい。

(尾辻克彦『少年とグルメ』による。)

問い 本文の内容に合致するものに①、合致しないものに②をマークせよ。 解答番号は

36

45

。

- (36) カレーライスはちゃんとした食べ物ではない、と筆者は考えている。
- (37) 筆者が外でカレーライスを注文しないのは、カレーライスが可哀相な食べ物だと考えるからである。
- (38) カレーライスはどこで食べても、だいたい、はずれることはない、と筆者は思っている。
- (39) 子供のうちに辛いものを食べるとバカになる、と筆者は信じている。
- (40) 筆者は、自分の子供が高校生になったら、辛いカレーライスを食べさせて早く追い出そうと企んでいる。
- (41) 筆者は、カレーに入れるジャガ芋の芽を抉り取らないと、家庭悲劇が起ころうと考えている。
- (42) 戦後の食糧難を生き抜いてきた人々は、ジャガ芋のゴロリとしたボリュームに心強さを感じている、と筆者は述べている。
- (43) 筆者は、メリケン粉を使った粘土のようなカレーは、豊かさの象徴だったと考えている。
- (44) 昔のカレーライスが辛かったのは、辛いという理由がなかったからだ、と筆者は考えている。
- (45) かつて、家庭でカレーライスを食べるのは、祝祭のときに限られていた、と筆者は述べている。

問8 枠で囲んだ文章に続くように、後ろの①～⑥の文章を並べ替え、その2番目と4番目に位置するものの番号を答えよ。

解答番号は2番目＝46、4番目＝47。

僕の両親は、どちらも読書家だった、と思う。父は、若いときには詩を書いたらしい（これは母から聞いた話だ）。小説なども、名作はほとんど読んでいて、作家の名前や作品名などがときどき話に出てくる。しかし、毎日読んでいるのは、ほとんどが新聞だった。中年以降は油絵を習い始め、毎日絵を描いていた。職業は建築の設計だった。

父は、子供にほとんど干渉しない人で、僕は、なにかをしろと言われたことがない。勉強をしなさいとか、もっと頑張らなさいなどとも言わない。一つだけ言われたのは、大人になったら自分の力で生きていけ、ということ、子供のうちは援助をするが、成人したらそれはなくなる、という意味のようだった。

一方の母は、短歌が趣味で、同人誌に参加していたし、個人誌も作っていた。古典を読んだりしていたし、だいたいいつも分厚い辞書を広げていた。これは、短歌のために言葉を探していたのだろう。母は教育熱心な人で、参考書や問題集を買ってくる。それがときどき机の上に置いてあった。そういうプレッシャーのかけ方をする人だった。

① しかし、実物のヘリコプタがどうやって姿勢を制御しているのか知りたくなった。百科事典などを調べたくらいでは詳しいことはわからない。もちろん、質問できる大人にはきいて回った。学校の先生も知らなかった。この疑問も、解決してくれたのはやはり本だった。図書館でヘリコプタに関する本を何冊も読んだのだ。

② つまり、文章を読んでも、本当の意味は理解できない。むしろその逆だといえる。意味が理解できたとき、初めて文章が読めたことになるのだ。

③ 図面で示されていたが、最初はまったく理解できなかった。その機構がどう動くのかわからない。文章を何度も読み、図面と照らし合わせ考える。何時間もじっと図を見続けていることがあった。そして、あるとき、ついに機構がわかったのだ。わかってみると、今まで何度も読んだ文章が、初めて意味を持つことになる。

④ 工作が好きだったので、そのための本ばかり読んでいた。ヘリコプタに興味を持った小学四年生るとき、家の中で動く模型を作った。これは、ヘリコプタの模型を棒の先に取り付け、反対側に重りをつけて天秤てんびんのように釣り合わせた装置だった。こうして、自重を相殺した状態であれば、モーターでプロペラを回せば浮き上がるわけである。この仕組みで自由に移動できるものを考案し、部屋の中で飛ばして、爆弾を落としたり、ロープを出して荷物を引き上げたりして遊んでいた。

⑤ 僕が本が嫌いなことを、二人とも気にしていた。読みなさいと言われたことはないが、それとなく、独り言のように「この本は面白かった」とか呟つぶやいたりするのだ。それから、僕の部屋の本棚に、世界名作全集みたいな本を並べたりする。まったく読む気はなかったので、棚から引き出したこともなかった。息子がなんとか興味を持たないものか、と願っていたのは確かなことだっただろう。

⑥ 「わかる」という意味はこういうことなのだ、という経験をした。これは、その後も、僕の人生に何度か訪れる「好機」といえるものとほぼ一致しているだろう。

（森博嗣『読書の価値』による。）